最近のドゥンガン研究の概況
――特にソ連崩壊後の言語学研究について――

菅野　裕臣

ここでドゥンガンと呼ぶものは基本的に 19 世紀後半―20 世紀中頃に中国から中央アジアに移住してきた中国系のムスリムを指すこととし、中国の回族とは別個に扱う。

日本では橋本萬太郎が 1950 年代からドゥンガン語に対する関心を表明していたが、1976 年に外国人としては初めてソ連キルギズ共和国のフルンゼとアレクサンドロフカへの訪問が実現し、後に Svetlana Rimsky-Korsakoff Dyer らがドゥンガン人の故地を訪問し、研究を深化させた。橋本萬太郎は主として言語学を、Svetlana Rimsky-Korsakoff Dyer は言語と文学を研究したが、彼らはソ連におけるドゥンガン研究にも言及している。

しかしソ連の閉鎖的体質はソ連崩壊 = 中央アジア諸国の独立以前のドゥンガン研究の全貌をさらけ出すことを妨げて来たが、ソ連崩壊後もドゥンガン人居住地域が中央アジア三国にまたがって分散していること、ドゥンガン人どうしの連絡もよく取れていないことなどによりドゥンガン研究の基本的資料を得ることは容易なことではない。

ソ連崩壊前のドゥンガン研究の状況の把握は別の機会に俟つこととし、ここでは主としてソ連崩壊後のドゥンガン人、特にその言語に関する状況の紹介に不完全ながら努めることにする。必要に応じてソ連崩壊前にも言及する。

＊＊＊

中央アジアに移住したドゥンガン人の知識層には漢字やアラビア文字の知識を有するものもいたと思われるが、それについての記録はない。中国の回教徒がアラビア文字で記した言語はつとにヨーロッパ人の関心を集めたが，「『小児錦』文字資料コーパス構築へむけた資料収集とデジタル化」研究プロジェクト（2001-5 年間）代表者：町田和彦（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）により収集された「小児錦」あるいは「小経」と呼ばれるアラビア語，中国語との 2 つあるいは 3 つの対照になる小冊子もそれに類するものであり（黒岩 [2003, 2004] 参照）、恐らくはその全貌の把握はかなり難しそうである。ドゥンガン人言語学者 A. Дж. Калимов 所有の「小児錦」は革命前にタシュケントで印刷されたものと言われ、筆者がアレクサンドロフカのドゥンガン人モスクで見たのは革命前のサンクト・ペテルブルク出版のものだったから、ドゥンガン人もそれを所有していた可能

性がある。ただし「小児錦」の言語とドゥンガン語との異同は定かではない。2003 年にはクルグズスタンのカントでクルアーンのドゥンガン語訳というものが出版されているが（「参考文献」B. 参照）、この訳者は中国からの移住者と思われ、この言語の性格も明らかではない（現在中国語と漢字を知るドゥンガン人の多くはソ連時代に中国から何らかの理由で移住したものであり、その民族性は不明瞭である）。この分野の研究が立ち遅れている。

ドゥンガン人を最初に観察したのはロシア人であり、革命後タシュケントで教育を受けたドゥンガン人知識人にドゥンガン研究が託された。ドゥンガン語の最初の研究者はロシア人言語学者 Е. Поливанов であり（彼を通じて西欧にドゥンガン語が知られた）、彼はドゥンガン人言語学者 Юсуп Яншансин その他を育てた。この世代及び次の世代（主として第 2 次大戦後の）がドゥンガン語の、最初はラテン字の、後にキリル字の正書法を作り、それにより教科書，辞書，新聞等を作成するに及び、ドゥンガン語は書写言語としての地位を確立した。しかしながらソ連崩壊以前の、特にラテン字によるドゥンガン語資料の多くはクルグズスタンにも保存されておらず、今後モスクワでの本格的な調査が俟たれる（ドゥンガン人は旧ソ連の多くの資料と同様にそれらはモスクワ郊外の Химки の書庫に眠っていると指摘している）。

ソ連崩壊後深刻な財政難にもかかわらずドゥンガン語及びドゥンガン文学の教科書は維持され（Бугазов, Дўфызы [1993] — 1 学年用、Жон, Шысыр [2007] — 2-3 学年用、Яншансын, Хаваза [2007] — 4 学年用、Имазов [2002] — 5 学年用、Шысыр [2007] — 7 学年用、Цунвазо, Жинлиров [2007] — 8-9 学年用が印刷された）。ドゥンガン新聞 «Хуэймин бо. Дунган газетасы. Дунганская газета. 回民报 » はソ連崩壊後発行は苦難の連続だったが、最近は月 2 回刊（発行部数 3,600 部）、しかも 8 面（うち 4 面はカラー印刷）を維持している。ただし旧ソ連の少数民族の新聞と同様、ロシア語の紙面がドゥンガン語を上回っており、危機言語としてのドゥンガン語の性格を物語っている。ドゥンガン語のテレビ放送はすでに中止となり、かろうじてドゥンガン語のラジオ放送が細々と行われている（池田 [2012[3]]）。学校でドゥンガン語教育を担当する教員の養成機関はなく、多くはロシア語の教員が兼任している。ロシア語とドゥンガン語による雑誌 «Хуэйзў 回族 Дунгане»（X 1, X 2, X 3, X 4, X 5-6）は恐らく財政難故に残念ながら発行を中止している。

ソ連崩壊後ドゥンガン語は西欧で社会言語学の研究対象となったが、それが完全に中国語の方言なのか、独立の言語なのか、一種のクレオールなのかの論議は、それの形態論やシンタクスの研究と相まって、もっとなされてよい。一部の人が強調するほどドゥンガン語と普通話とが通じないのは（例えば中国の学術会議に招待されたドゥンガン人にはロシア語の通訳を付けざるを得ないという事実がある）主として語彙とその用法の違いによるところが多そうである（ドゥンガン語はロシア語からの翻訳を通してロシア語を下敷きに

した言語となったと言える)。また多くのドゥンガン人の指摘するところであるが、ドゥンガン語と似ていると言われる新疆のイリ地区の中国語方言とドゥンガン語との異同も調査の対象となる。

なおドゥンガン語のキリル字正書法は声調を一切表記しないことで知られるが、筆者の知る限りでは、Мансурова [2011[2]]［幼児向け物語］と外国人ながら Rehorn [2005]［ドゥンガン語の音韻に関する学術論文］だけは声調記号（ˇ 陽平声，ˊ 陰平声，ˋ 上声，ˉ 去声，無符号：軽声）を付しており、特に前者はアレクサンドロフカ出身の非言語学者であるために非体系的な声調の記述がかえって興味深い。

ドゥンガン語で書かれるもっとも多いジャンルは詩であり、詩集の刊行が目立つ（Мансурова [1997, 2008, 2011[1]], Мусаева-Машанло [2006], *Чинмё: сывын, шёфэ* [1991], Юнузова [2007], ЯШ I, ЯШ II［ロシア語訳］)。ほかに児童向けの物語（Мансурова [2011][2]), Машинхаева [2005])、小説（*Мансўзы. Повесть* [1997])、新訳聖書のドゥンガン語訳（*Инжил* [2006]）がある。

ソ連時代はドゥンガン語をソ連国内の唯一の孤立語として、特に中ソ論争の時期には中国との学術交流も一切途絶えたため、独立の言語としての地位が与えられたが、ソ連崩壊後中国との交流が深まるにつれ、ドゥンガン語は中国語北方方言の一種とする見方が一般化しつつある。Завьялова は初め中国語方言研究の一環としてドゥンガン語に関心を持ち、Рифтин は中国民間伝承の研究としてドゥンガン人のそれに着目したものであり、Городецкий は一般言語学の立場から孤立語としてのドゥンガン語の意味記述に関心を持ったものである。Б. Ю. Городецкий は弟子の Зевахина その他とともにクルグズスタンのドゥンガン人のもとでフィールド・ワークによりドゥンガン語・ロシア語辞典作成の試みをなしているが（筆者はその草稿の一部を見たことがある。ドゥンガン語にはすべて声調記号がつけられている)、それがいまだに公表されないのは実に惜しい。ソ連崩壊前に出版されたドゥンガン語の辞典類はあまりない（これについても詳しい考察が必要である)。ソ連崩壊後刊行された *Жеёди хуэйзў-вурус хуадян* [2009]［ドゥンガン語＝ロシア語辞典］と *Вурус-хуэйзў хуадян: Русско-дунганский словарь* [2008])［ロシア語＝ドゥンガン語辞典］はソ連崩壊前のものの改訂版であるが（前者では全面的に、後者では部分的にドゥンガン語語彙には声調記号が付される。I 平声，II 上声，III 去声)、中国語（普通話）からの多くの借用語が含まれることがクルグズスタン独立後のドゥンガン人と中国との関係を物語っている。

ソ連末期から中国人及び回族研究者がビシュケクに来てドゥンガン語を観察するようになり、中央アジア・ドゥンガン人の言語，文学，歴史に関する多くの論著が現われた。主たる研究者として胡振華（言語学；北京、中国民族大学)、丁宏（民族学；北京、中国民族

大学)、海峰（言語学；ウルムチ、新疆大学語言学院)、林涛（文学；寧夏回族自治区銀川市、北方民族大学北方民族語言研究院)、常文昌（文学：甘粛省蘭州市、蘭州大学文学院中国文学系)、王国傑（歴史；陝西省西安市、陝西師範大学歴史系）がいる。これは機会を改めて別個に紹介する必要がある。彼らはまたドゥンガン語の語彙に漢字をあてる作業をもなしたが（「参考文献」C. 参照)、この作業はなおも問題をはらんでいると思われる。

現在クルグズ共和国民族科学アカデミー・ドゥンガン学・中国学センター Центр дунгановедения и китаистики Национальной Академии наук Кыргызской Республики を中心にドゥンガン研究が行われており、いわばドゥンガン人の第 3 世代ともいうべき人々が活躍している。言語学，文学の M. Х. Имазов（ドゥンガン学・中国学センター)、言語学の M. В. Джумаза, Ф. Н. Хаваза, Р. М. Исмаева（Калимов は 2011 年に死去)、民族学の А. А. Джон, М. Д. Савуров (Совуров)、口承文芸の И. С. Шисыр (Шысыр)、社会科学の Р. У. Юсупов らがそれである（菅野 [2012] 参照；このうちクルグズスタンの Имазов, Джон,.Юсупов，ウズベキスタンの Савуров の 4 名は 2010 年の「中央アジア・ドゥンガン人に関する国際研究集会」（東京外国語大学）に参加した；『ドゥンガン国際研究集会』、『ドゥンガン論集』参照)。

ロシア人ドゥンガン研究者としては上掲の Борис Рифтин（中国文学；ロシア科学アカデミー会員；2012 年死去)、О. И. Завьялова（中国言語学)、Б. Ю. Городецкий（一般言語学)、Т. С. Зевахина（意味論，語彙論）がおり、ロシア人以外のヨーロッパ人としては上掲のオーストラリアの Rimsky-Korsakoff Dyer、ドイツの Riedlinger のほかにフィンランドの Olli Salmi（ドゥンガン語の声調と文法に関心を持つ)、Brigitte Rieger, Elisabeth Allès, Paul Wexler らがドゥンガン社会言語学に関心を持っている（以上 Spira, Ivo 参照)。ノルウェーの Ivo Spira は The Digital Archive of Dungan Studies, http://folk.uio.no/ODADS/ という Web ページを運営しており、ボン大学教授だった Riedlinger の蔵書を基礎にあらゆるドゥンガン資料のディジタル化により世界のドゥンガン研究に寄与しようとしており、極めて有意義である。

橋本萬太郎亡き後の日本では（「参考文献」F. 参照）犬塚 [2001, 2005, 2011]（島根県立大学）が橋本萬太郎の紹介や胡振華の論文の翻訳、紹介を行い、菅野 [2007[1], 2007[2], 2012], Канно [2006], Kanno [2008], 菅野 [2005] はドゥンガン語の正書法を論じ、ドゥンガン関係論著の目録を作成し、池田 [2012[1], 2012[2]] はドゥンガン語を社会言語学的に論じている。また 2010 年に東京でドゥンガン人に関する国際研究集会が持たれたが、これが日本人にドゥンガン研究の刺激を大きく与えたことは特記される。電子メール･マガジンではあるが、「日本ドゥンガン研究会報」の第 1 号（2012）に引き継ぎ、第 2 号の準備が進んでいる。荻原真子によるボリス・リフチン『ドゥンガンの民話と伝説』の日本語訳が進行中である（『中国民話の会通信』、東京)。

直接言語研究と関連しないが、ソ連崩壊後刊行された重要なドゥンガン文献としては論

文集（ДУ, ДУ II, ДУ III, ДУ IV, ДУ V, ЯШ）、百科事典（*Дунганская энциклопедия* [2005], [2009]）、概説（Юсупов Р. У. [2005]）、人物志（*Дунгане: история в лицах* [1998], Вансванова [2000], Имазов, Р. У. Юсупов [2005]）、民族学（Джон [2007], Шисыр [2004], Савуров [2007[1], 2007[2]]、歴史（Джон [2009]）等の書籍がある。

ドゥンガン言語学ではドゥンガン語正書法と関連してドゥンガン語の音声学と音韻体系の問題が依然として大きな比重を占めている。勿論正書法の確定にはラテン字の場合はE. Поливанов、キリル字の場合はA. A. Реформатский の理論の影響が見て取れるが。これにさかのぼって再検討すべきである（モスクワ音韻論学派の理論は中国語のような言語にはほとんど適用し得ないであろう）。また文法に関しては，O. И. Завьялова も指摘しているところであるが、ロシア語の概念を孤立語であるドゥンガン語に適用する誤りがしばしば犯されている。ドゥンガン語の辞書論、語彙論、文法論の基礎的な研究は一層の深化を要求されている。

参考文献

A. ドゥンガン語（キリル字）、ロシア語

АПРДЯЛ: *Актуальные проблемы развития дунганского языка и литературы: Материалы международной научно-практической конференции.* 2001. Алматы: Эверо, 164 стр.

Бугазов, Ш. Х., Б.Дўфызы. 1993. *Шызыкуэ*, Бишкек: «Кыргызстан», 119 стр.

Вансванова, Мария. 2000. *Дунгане: люди и судьбы*, Алматы: «Сөздік - Словарь», 238 стр.

ВДЛЛ: *Вопросы дунганской лексикологии и лексикографии*, Бишкек: «Илим», 1991.

Вурус-хуэйзў хуадян: Русско-дунганский словарь (2008), Составители: Юсуп Яншансин и Лоджэр Шинло, Изд. 2-ое перераб. и доп., Бишкек: Национальная Академия наук Кыргызской Республики. Отдел дунгановедения, 353 стр.

Джон, А. А. 2007. *Обычаи, обряды и поверья дунган Кыргызстана и Казахстана*, Бишкек: Илим, 99 стр.

Джон, А. А. 2009. *Дунгане и беловодское восстание 1918 года в Пишпекском уезде*, Национальная Академия наук Кыргызской Республики. Отдел дунгановедения и китаистики, Бишпек: «Илим», 85 стр.

Джон, Али. 2011. *Тайный лес: Стихотворения*, Бишкек, 88 стр.

Джумаза, М. В. 2010. *Тереоретические проблемы орфографии дунганского языка,* Бишкек: Илим (Национальная академия наук Кыргызской Республики. Институт истории и культурного наследия. Центр дунгановедения и китаистики), 126 стр.

ДУ : *Диалог ученых на Великом Шелковом пути*. 2002, Бишкек: Илим (Национальная академия наук Кыргызской Республики. Отдел дунгановедения), 160 стр.; ДУ II: Выпуск II, 180 стр.;

ДУ III: Выпуск III, 156 стр.; ДУ IV: Выпуск IV, 259стр.; ДУ V: Выпуск V, 152 стр.

Дунгане: история в лицах. 1998. сост. С. И. Янлосы, Алматы, 191 стр.

Дунганская энциклопедия. 2005. Бишкек: Илим (Национальная академия наук Кыргызской Республики. Отдел дунгановедения), 309 стр.; 2009. Издание второе, исправленное и дополненное, 473 стр.

Жеёди хуэйзў-вурус хуадян. 2009. Бонжер 12 000 хуа, Чынзуәҗя: Юсуп Яншансин, Ди эргә чўбан, шыдуәхади зәмусы тянхали, Москва: ФБЩ (Хырхыз Гунхәгуәди Минзў Йицанди щүәйүан Хуэйзўщүә дэ Ханщүә жунщин), 286 стр., 2009. / *Краткий дунганско-русский словарь*. Около 12 000 слов, Составитель: Юсуп Яншансин, Издание второе, исправленное и дополненное, Москва: ИПБ (Национальная Академия наук Кыргызской Республики. Институт истории и культурного наследия. Центр дунгановедения и китаистики), 286 стр.

Жон, А., Шысыр И. 2007. *Фуму йүян 2-3*, Бишкек: Илим, 151 стр.

Завьялова, О. И. 1979. *Диалекты Ганьсу*, Академия наук СССР, Институт Дальнего Востока, Москва: Издательство «Наука» Главная редакция восточной литературы, 118 стр.

Завьялова, О. И. 1992. «Сино-мусульманские тексты: графика – фонология – морфонология», *Вопросы языкознания* № 6, стр. 113-122.

Завьялова, О. И. 1996. *Диалекты китайского языка*, Российская Академия наук, Институт Дальнего Востока, Москва “Научная книга”, 207 стр.

Завьялова, О. И. 2007. «Китайские мусульмане *хуэйцзу*: язык и письменные традиции», *Проблемы Дальнего Востока* № 3, стр. 153-160.

Завьялова, О. И. 2010. *Большой мир китайского языка*, Москва: Издательская фирма «Восточная литература», 287 стрж; ［Китаеязычные мусульмане хуэйцзу: сино-исламские языковые контьакты, стр. 134-141］.

Завьялова, О. И. 2011. «Абдурахман Джамалович Калимов. Кандидат филологических наук (05.05.1923---08.08.2011)»
http://orientalstudies.ru/rus/index.php?option=com_personalities&Itemid=74&person=7

Завьялова, О. И. , Л. Р. Концевич и Б. Л. Рифтин. 2012 «Memoriam Абдурахман Джамалович Калимов», *Восток (Oriens)* 1, стр. 216-217.

Имазов, М. Х. 1993. *Грамматика дунганского языка*, Бишкек: “Илим”, МП “Таблица”, 215 стр.

Имазов, М. Х. 2002. *Хуэйцзў йүян 5*, Бишкек: «Мектеп» чўбәншә, 83 стр.

Имазов, М. Х. 2011. *Полвека в мире науки и образования (Избранные статьи)*, Бишкек: Илим, (Национальная академия наук Кыргызской Республики. Институт истории и культурного

наследия им. К. К. Каракеева. Центр дунгановедения и китаистики), 334 стр.

Имазов, М. Х., Р. У. Юсупов. 2005. *Портреты современников*, Бишкек: Илим, 168 стр.

Инжил: *Матфей, Марк, Лука, Йихия щехади Инжил, Апостолму ганхади сычин*. 2006. Москва: Фан Китабуди Дащүә, 420 стр.

Калимов, А. Дж. 2003. *Имена среднеазиатских дунган*, Бишкек: Илим, 102 стр.

Канно, Хирооми. 2006. «Дунганский язык и его орфография», *Xorijiy filologiya. Til, adabiyot, ta'lim; Foreign Philology. Language, literature, education*, 4 (21), Samarkand, pp. 19 - 25.

Мансурова, Айша. 1997. *Щүәхуар (Ваму нянди щёфа)*, [Бишкек], 120 стр.

Мансурова, Айша. 2008. 阿依沙・曼蘇洛娃 (著) “*Щүә хуар* 雪花兒 ” 林涛　崔鳳英 譯 香港：中國科學文化出版社 191 頁.

Мансурова, Айша. 2011[1]. *Щинэ Зўгуй: стихи на дунганском языке*, Бишкек: «Эркин-Тоо», 179 стр.

Мансурова, А. 2011[2]. *Шōнфӯдӗр*, Бишкек: Аль Салам, 12 стр.

Мансўзы. Повесть. 1997. Хавазов, Якуб. *Мансўзы. Повесть,* Бишкек, 237 стр.

Машинхаева, Фатима. 2005. *Нэнэди гўҗер. Бабушкины сказки,* Бишкек, 210 стр.

Мусаева-Машанло, Фатима. 2006. *Новый сборник стихов “Лабиринты судьбы,”* Тараз, 65 стр.

Рифтин, Борис. 1977. Дунганские народные сказки и предания, Москва: Издательствр «Наука», 560 стр. Cf. 李福清 2011; ボリス・リフチン 荻原真子訳.

Савуров, М. Д. 2007[1]. *Дунганская семья: Прошлое и настоящее*, Ташкент, 142 стр.

Савуров, М. 2007[2]. *Секреты дунганской кухни*, Ташкент, 100 стр.

Х 1: Хуэйзў　*回　族 Дунгане*. Общественно-политический и художественно-публисцический журнал, Бишкек: Общественный фонд «Дунганская культура и образование», No 1, Май 2001 г., 118 стр.; Х 2: No 2, Октябрь 2001 г., 120 стр.; Х 3: No 3, Декабрь 2002 г., 120 стр.; Х 4: No 4, Март 2004 г., 116 стр.; Х 5-6: No 5-6, Декабрь 2006 г., 150 стр.

Хаваза, Ф. Н., Янщансин, Ю. 2007. *Хуэйзў йүян 4*, Бишкек, 109 стр.

Хаваза, Фатима Нуровна. 2012. *Заимствованная лексика дунганского языка*, (Национальная Академия наук Кыргызской Республики. Институт истории и культурного наследия им. К. К. Карасаева. Центр дунгановедения и китаистики), Бишкек: «Илим», 143 стр.

Цунвазо, Ю., М. Жинлиров. 2007. *Хуэйцзў йүян 8-9*, Бишкек, 132 стр.

Чан, Вэньчан. 2003. *Ясыр Шиваза и китайская поэзия*, Бишкек: Илим, 126 стр.

Чинмё: сывын, щёфә. 1991. Фрунзе: «Адабият», 75 стр.

Шывазы, Ясыр. 2006[1]. *Вугынцыр: Тёҗянхади зуәпин*, Бишкек: «Илим» чўбаншә, 416 стр.

Шиваза, Ясыр. 2006[2]. *Лунные строки: Стихотворение и поэмы*, Перевод с дунганского,

Бишкек: Илим, 382 стр.

Шисыр, И. С. 2004. *Прозаический фольклор хуэйцзу Центральной Азии*, Бишкек: Илим, 2004, 278 стр.

Шысыр, И. 2007. *Фуму вынщүə 7*, Бишкек: «Илим», 172 стр.

Юнузова, З. Ш. 2007. *Чиннёнди ян (Җёйүанди гуанкан)*, Бишкек, 187 стр.

Юсупов, Р. У. 2005. *По обе стороны Тянь-Шаня*, Бишкек: Илим, 212 стр.

Яншансын, Ю., Ф. Н. Хаваза. 2007. *Хуэйцзў йүян 4*, Бишкек, 109 стр.

ЯШ: Ясыр *Шиваза. Основоположник дунганской литературы. Юбилейный сборник научных статей*, Национальная Академия наук Кыргызской Республики. Отдел дунгановедения. Бишкек: Илим, 127 стр., 2001.

ЯШ I: *Шывазы Ясыр. «Вугынцыр: Тёҗянхади зуəпин»*, Бишкек: «Илим» чўбаншə, 2006, 416 стр.

ЯШ II: *Шиваза Ясыр. «Лунные строки: Стихотворение и поэмы»*. Перевод с дунганского, Бишкек: Илим, 2006, 382 стр.

Rehorn, Elke. 2001. «Хуэйзў вынхуади вынти» in АПРДЯЛ, стр. 73-83.

Rehorn, Elke. 2005. Хуэ́йзў йүянди шы̆нйи̇н дə̄ жӯнйи̇н (Га́нсўди фə̆шу). Cf. Spira, Ivo.

B. ドゥンガン語（アラビア文字）

Коран на дунганском языке. 2003. [на арабской письменности]. Автор: Юнузов Абдулла Шофузович. [Кант]. 667 стр.

C. ドゥンガン語（漢字）

兰阿洪诺夫 , 黑牙 2004 (辑录) “ 中亚回族的口歌和溜儿 ” 林涛 编译 香港 : 香港教育出版社 198 页。

曼蘇洛娃 , 阿依沙 2008 “ 雪花兒 *Щүə хуар*” 林涛 崔鳳英 譯 香港：中國科學文化出版社 191 頁。

依玛佐夫 M. X. 2004 “ 中亚回族诗歌小说选译 ” 林涛 编译 香港：香港教育出版社 179 页。

伊马佐夫 2001 (编著) “ 亚瑟儿・十娃子 生活与创作 ” 丁宏编译 银川：宁夏人民出版社 264 页。

D. 英語

Kanno Hiroomi. 2008. “The Dungans and Their Language,”『アルタイ語研究 II（語学フォーラム）』（大東文化大学）第 15 号 45-60 頁 .

Rimsky-Korsakoff Dyer, Svetlana. 1991 *Iasyr Shivaza. The Life and Works of a Soviet Dungan Poet*, Frankfurt a.M.: Peter Lang, 304 pp.

Salmi, Olli. 2007. Central Dungan as a Chinese Dialect.

Spira, Ivo. “The Digital Archive of Dungan Studies,” http://folk.uio.no/ivos/ODADS/(University of Oslo).

Zavjalova, Olga I. 1978. “Some Phonological Aspects of the Dungan Dialects,” *Computational Analyses of African and Asian Languages* 9, pp. 1-24.

E. 中国語（中国在住の中国人のものを除く）

李福清 2011 “ 东干民间故事专说集 ” 海峰 : 东干语转写 连树声 : 俄语翻译 上海 : 上海文艺出版社 533 页（Борис, Л. Рифтин. 1977. *Дунганские народные сказки и предания*, Москва, の翻訳)。

刘勋宁 2012 东干杂感『日本ドゥンガン研究会報』第 1 号 , 32-34 頁。

犬冢优司 2009《日本著名已故语言学家桥本万太郎对东干语研究情况》胡振华主编 “ 中亚东干学研究 ” 北京：中央民族大学出版社 229 - 237 頁。

F. 日本語

池田寿美子 2010, 2012[1] ウズベキスタンにおける言語とドゥンガン人の社会生活『ドゥンガン国際研究集会』150-158 頁 ;『ドゥンガン論集』94-102 頁。

池田寿美子 2012[2] 中央アジアにおけるドゥンガン言語文化事情 — 現代キルギスタンを中心として —『日本ドゥンガン研究会報』第 1 号 , 35-42 頁。

池田寿美子 2012[3] ドゥンガンの言語文化を未来に継承するために — 危機言語としてのドゥンガン語 —『ドゥンガン論集』103-116 頁。

犬塚優司 2001 (書評) 胡振華「キルギス共和国の東干語、中国語教育の現状」ニダバ (*Nidaba*）30, 162-169 頁（胡振华『吉尔吉斯斯坦共和国的东干语、汉语教学研究』)。

犬塚優司 2005 (訳注) 胡振華「東干」「東干語」「東干人のバイリンガル」「東干学」について「総合政策論叢」島根県立大学総合政策学会 第 10 号 , 109-114 頁（胡振华「关于『东干』、『东干语』、『东干人的双语』和『东干学』」『语言与翻译』2004 年第 1 期 页 12-14)。

犬塚優司 2011 (書評) 胡振華主編『中亜東干学研究』ニダバ（*Nidaba*）40, 129-134 頁（胡振华主编『中亚东干学研究』北京：中央民族大学出版社 2009 年).

犬塚優司 2011 (訳注) 胡振華 東干族の言語文字の学習と使用の問題「総合政策論叢」島根県立大学総合政策学会 第 20 号，119-126 頁（胡振華主編『中亜東干学研究』 2009 中央民族大学出版社）154-160 頁)。

菅野裕臣 2007 ドゥンガン語とその正書法『現代中央アジア少数民族における言語接触に関する研究』東北大学東北アジア研究センター（代表者：柳田賢二）2007, 15-24 頁。

菅野裕臣 2012 ドゥンガン関係論著，略歴目録（1997 年以降）菅野裕臣 (編)『ドゥンガン論集』東京：東京外国語大学 117-279 頁。

黒岩高 2003 中国各地における小児錦の使用状況と出版物について — 雲南・甘粛省を中心

に — 町田和彦・黒岩高・菅原純 (共編)『中国におけるアラビア文字文化の諸相』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 13-67 頁。

黒岩高 2004『小児錦』出版物とその表記法 — 甘粛省臨夏の例を中心に — 町田和彦・黒岩高・菅原純 (共編)『周縁アラビア文字文化の世界 — 規範と拡張 —』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 27-63 頁。

『ドゥンガン国際研究集会』:『中央アジア・ドゥンガン人に関する国際研究集会』（予稿集）2010 東京：東京外国語大学 166 頁（日本語，ロシア語）。

『ドゥンガン論集』: 菅野裕臣 (編)『ドゥンガン論集』東京：東京外国語大学 2012 280 頁。

橋本萬太郎 1999『橋本萬太郎著作集　第二巻　方言』東京：内山書店 1999（東干語 521-622 頁）。

リフチン，ボリス『ドゥンガンの民話と伝説』荻原真子訳『中国民話の会通信』東京。

G. 朝鮮語

菅野裕臣　2005　JungangAsia'eui Dung'gan'eoeui 小兒錦 eui eoneo, *Altai hagbo*, Je 15 ho, 169-191 peji.

H. Web ページ

Digital Research Archive of Dungan Studies (Oslo): http://folk.uio.no/ivos/ODAS/

I. 電子メール・マガジン

『日本ドゥンガン研究会報』日本ドゥンガン研究会：hkanno@cba.att.ne.jp 第 1 号（2012 年 7 月）。

（東京外国語大学名誉教授）